

セラミック九州

CERAMIC KYUSHU

佐賀県立九州陶磁文化館報
Kyushu Ceramic Museum News Letter

No.60

編集・発行 佐賀県立九州陶磁文化館

発行年月日 令和6年(2024)3月15日

〒844-8585佐賀県西松浦郡有田町戸杓乙3100-1

TEL. 0955-43-3681 FAX. 0955-43-3324

<https://saga-museum.jp/ceramic/>

E-mail: kyuto@pref.saga.lg.jp



そめつけうらしま たろうもんおおざら 〈染付浦島太郎文大皿〉

ひぜん ありた
肥前 有田

1800 ~ 1860年代

佐賀県立九州陶磁文化館 所蔵

せがわたけお
瀬川竹生コレクション

口径40.0 高さ7.2 底径21.1

この大皿には、浦島太郎が亀の背に乗り、波を越えて龍宮城へ導かれている様子が描かれている。幕末期には、染付の大皿が肥前地域でさかんに生産された。大皿には、当時の文学、信仰や名物を反映する様々なテーマが生き生きと描かれた。中でも有田の大皿は、その画力において秀でた作例で知られる。

浦島説話は、古くは奈良時代から存在していたとされ、江戸時代のいつごろからか異郷（龍宮城）への移動には、亀に乗っていくという印象的な場面で語られるようになる。北斎漫画初編（初版は1814年刊行）でも、浦島太郎は釣り竿とともに亀に乗り、玉手箱を持った姿で描かれている。当時の人々は、時を忘れた浦島太郎よろしくこの大皿とともに宴席を楽しんだことであろう。

～令和5年度特別企画展の報告～

企画展

なんて書いてあると？ —お皿の裏話—

やきものの裏を見ると、表の文様とは違った文字やマークが書かれていることがあります。この文字やマークのことを「銘」と呼びます。

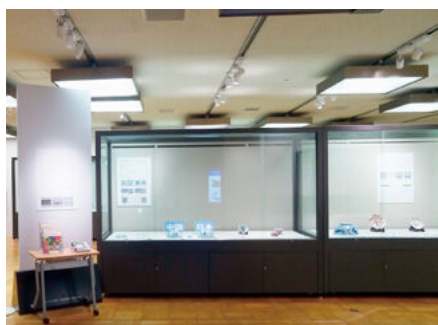
日本では、中国磁器に書かれた銘を模倣し、まるで中国で作られたかのように書かれた文字や、何をモチーフにしたのか分からない不思議なマークなど、バラエティー豊かな銘が生まれました。

この展覧会では色々な種類の銘や、時代によって変化していく銘、銘の書き方の違いや産地による違いなど銘に関する様々なことを御紹介しました。県立図書館とのコラボ展示や子供向けのクイズシート、ポケット学芸員での画像や解説の配信など、普及啓発や理解の促進、満足度の向上を意図した新たな取組も行いました。

- 主 催 佐賀県立九州陶磁文化館
- 会 場 佐賀県立九州陶磁文化館
第4～5展示室
- 会 期 令和5年(2023)9月30日(土)～
11月26日(日) 50日間
- 休 館 日 月曜日
※10月9日(月・祝)は開館し、翌日休館
- 観 覧 料 無料
- 展示作品 177件261点
- 関連イベント
 - (1) 学芸員によるギャラリートーク
毎週土曜日 ※やきものセミナー開催日を除く。
 - (2) 九州陶磁文化館やきものセミナー
(第5、6回)
企画展「なんて書いてあると？」を楽しむために
前編・後編
令和5年10月21日(土)、11月18日(土)



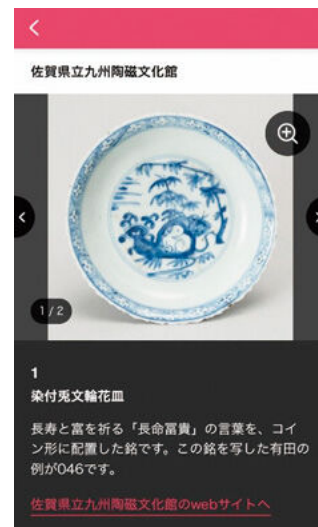
展覧会パンフレット
A4版 全16ページ



展示風景



展示風景



ポケット学芸員

～令和5年度企画展の報告～

新収蔵品展1 古伊万里から現代作まで

令和2年度から令和4年度に購入や寄贈などにより新たに収蔵した作品のうち42件51点を展示しました。ドイツのザクセン選帝侯アウグスト強王（1670-1733）の旧蔵品であることが明らかな金欄手様式の皿をはじめとする江戸期から明治期の有田焼、有田国際陶磁展の文部科学大臣賞受賞作品など、近世から現代までの作品を紹介しました。

- 主催 佐賀県立九州陶磁文化館
- 会場 佐賀県立九州陶磁文化館 第5展示室（一部の作品は他の展示室に展示）
- 会期 令和5年（2023）5月20日（土）～7月9日（日）44日間
- 休館日 月曜日
- 観覧料 無料
- 展示作品 42件51点
- 関連イベント 九州陶磁文化館やきものセミナー 第1回「新収蔵品展1 古伊万里から現代作まで」（令和5年6月17日（土））



展示風景



染付雲鶴文杏葉紋花瓶
佐賀県 有田 香蘭社 1910～1920年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵
音成志津子氏寄贈



色絵花盆文大皿
肥前 有田 1700～1730年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵

新収蔵品展2 古唐津とその周辺

令和4年度に山口陽二氏から当館に御寄贈いただいた作品30件43点をお披露目しました。安土桃山時代から江戸時代前期の古唐津と初期伊万里を中心に、福岡県の上野焼や長崎県の現川焼、さらに九州陶磁のルーツといえる朝鮮時代の陶磁器などを含む質の高い多彩な作品群を紹介しました。

- 主催 佐賀県立九州陶磁文化館
- 会場 佐賀県立九州陶磁文化館 第5展示室
- 会期 令和5年（2023）12月9日（土）～1月8日（月・祝）22日間
- 休館日 月曜日 ※1月8日（月・祝）は開館
- 観覧料 無料
- 展示作品 30件43点
- 関連イベント 九州陶磁文化館やきものセミナー 第7回「新収蔵品展2 古唐津とその周辺」のみどころ（令和5年12月16日（土））



展示風景



鉄絵草文四方皿
肥前 1590～1610年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵
山口陽二氏寄贈



鉄絵葦鳥文播座四方猪口
肥前 1590～1610年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵
山口陽二氏寄贈

～令和6年度企画展のお知らせ～

寄贈記念展
しゃくぎこう
赤戯幸コレクション

— 初期伊万里・初期色絵・初期鍋島の精華 —

令和5年度に個人蒐集家から寄贈された赤戯幸コレクションの受入を記念し、初期伊万里、初期色絵、初期鍋島を中心に構成された上質な肥前磁器43件を初公開します。

日本磁器のはじまりである初期伊万里様式にみられるおおらかで自由闊達な筆致、初期色絵の大胆な文様と色彩のコントラスト、将軍家への献上磁器としての鍋島様式が完成する前に試みられた初期鍋島の多様なデザインなど、主に17世紀に生み出された磁器の魅力を堪能できるコレクションの全作品を紹介します。

- 主催 佐賀県立九州陶磁文化館
- 会場 佐賀県立九州陶磁文化館 第5展示室
- 会期 令和6年(2024)6月1日(土)～7月15日(月・祝)39日間
- 休館日 月曜日 ※7月15日(月・祝)は開館
- 観覧料 無料
- 展示作品 43件47点



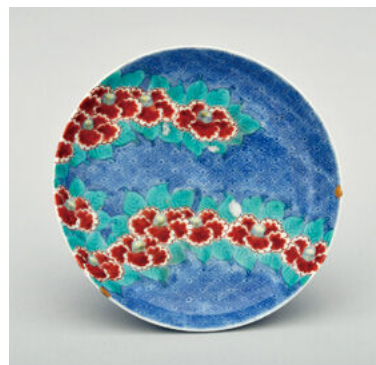
染付鶯文皿
肥前有田 1630～1640年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵
赤戯幸コレクション



色絵鳶文大皿
肥前有田 1655～1660年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵
赤戯幸コレクション



色絵牡丹文花形皿
肥前鍋島藩窯 1670～1690年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵
赤戯幸コレクション



色絵椿繫文小皿
肥前鍋島藩窯 1670～1690年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵
赤戯幸コレクション

～令和6年度企画展のお知らせ～

寄贈記念・特別企画展

江戸大皿百物語 —躍動する青の世界—

稀代の大皿コレクター 故瀬川竹生氏のコレクション100枚が寄贈されたことを記念し、江戸時代の有田大皿の魅力を紹介します。最大のもは66cmという迫力をほこっています。

100枚の大皿には、歌麿や広重の浮世絵をはじめ、東海道五十三次、金太郎、浦島太郎、蜃気楼、名酒の樽、鯉の滝登りなど当時の文学、信仰や名物を反映する様々なテーマが生き生きと描かれ、ダイナミックな画力に圧倒されます。すべての絵具は青色に深みがあり美しいものです。

有田の大皿は宴の中心に据えられ、大皿を囲んで人々が集い、食事をとりわけて絆をつないできました。日本の食事を豊かなものに発展させた象徴とも言うべきもので、SAGA2024国スポ・全障スポにあわせて開催し、佐賀県が誇る陶磁文化の繊細かつ大胆な側面をご覧ください。

- 主催 佐賀県立九州陶磁文化館
- 会場 佐賀県立九州陶磁文化館
第3～5展示室
- 会期 令和6年(2024)9月7日(土)～
11月4日(月・祝) 51日間
- 休館日 月曜日
※9月16日、23日、10月14日(月・祝)は
開館し、翌日休館
- 観覧料 無料
- 展示作品 120件120点(予定)



染付十二支文輪花大皿
肥前 有田 1820～1860年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵
瀬川竹生コレクション



染付鶴丸文大皿
肥前 有田 1820～1860年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵
瀬川竹生コレクション



染付酒樽散文輪花大皿
肥前 有田 1820～1860年代
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵
瀬川竹生コレクション

調査ノート

肥前磁器における八卦文様の変遷

徳永貞紹（佐賀県立九州陶磁文化館 シニア・アドバイザー・フェロー）

江戸時代の肥前磁器で用いられた様々な文様のうち八卦（はっけ、はっか）あるいは算木（さんぎ）と呼ばれる文様は、多用される種類ではないものの江戸前期から幕末まで長期間にわたり散見される。

八卦は中国で生まれた易において万物の根本原理を太極から生じた陰陽の二極に求め、陰陽を示す二種の基本記号である爻（コウ）を三つ組み合わせることで森羅万象の要素を表す、☰（乾）、☱（兌）、☲（離）、☳（震）、☴（巽）、☵（坎）、☶（艮）、☷（坤）、の八種の図形（卦）で、算木は八卦による易占や算術の用具である。

中国陶磁では、南宋～元代に龍泉窯青磁で香炉や盤等に陽刻文様として盛んに用いられ（図1）、初期の肥前磁器のモデルとなった景德鎮窯の染付磁器にも見られる（図2）。

肥前磁器における八卦文^{注1}の描かれ方には時代や製品の質・種類によって違いがあり、本稿では柴田夫妻コレクションなどの館蔵資料を中心に、その変遷について予察する。なお、卦に由来する可能性がある文様でも端部が明確な角を意識しないものや変異など原形から逸脱して卦である確証がない資料は除外した。

肥前で八卦文が施される器種と部位については、

- 1) 皿・鉢類の口部内面、内側面、見込み、外側面、
- 2) 香炉・火入の外側面、の2通りが多い。他に蓋付碗の蓋と身の口部内面に施す例（柴田夫妻コレクション総目録3926、以下「柴コレ」＋番号で表記）や壺蓋の口縁部文様帯として施す例（後述）などもある。

施文方法は、染付や陽刻によるものが多い他、色絵や陰刻による例もみられる。

文様構成については、八卦が主文様となるものは少なく、内側面や口縁部の文様帯として施されることが多い。また、花卉文など他の単位文様と八卦を交互に組み合わせて配置するものがある。

八卦文が施された資料は卦の種類や配置により下記のとおり分類できる。

A類：八種の卦すべてを1つずつ用いるもの

A 1 類：易（後天図）の並び順で環状に配置

A 2 類：A 1 類以外の並び順で環状に配置

A 3 類：不規則に配置

B類：1種～数種の卦を用いるもの

B 1 類：卦を環状に5～8個配置

B 2 類：卦を1～4個配置

B 3 類：卦を別の単位文様と交互に環状に配置

初期の八卦文としては、1630～1640年代に六弁ないし八弁の稜花形小皿の内面を渦文等で充填した二本線で稜花に合わせて見込みと側部を区切り、区画内に卦の一部の種類を配置したB 1・B 2類が一定数あり（図3、ほか柴コレ0098・0086等）、六弁の稜花形小皿は窯ノ辻窯跡から複数の出土例がある^{注2}。小皿では八種の卦のうち「☲離」が特に用いられているが、外尾山窯跡から出土した同時期の八弁中皿では少なくとも「☴巽」「☲離」「☵坎」の3種を用いている^{注3}。

八卦文が肥前磁器の文様として定着するのは1630～1640年代と言えるが、初現は輪花鉢の八分割した外側面の区画内に3個の「☲離」と1個の「☰乾」を花卉文と交互に配置するB 3類の柴コレ0007例からみると1630年代以前に遡る可能性がある。

1640～1650年代は祥瑞意匠の窓に「☰乾」を入れるB 2類の変形小皿が目立ち（図4、ほか柴コレ0175・0230・0274等）、中皿も外尾山窯跡で四方の窓に「☰乾」を入れた1650年代頃の出土例がある^{注4}。

17世紀前半～中頃の八卦文は、景德鎮磁器の八卦文が原型と考えられ、全体の意味が理解されていたかは分からないが、特に多用される「☲離」は後天図の最上部に配置される卦であり、「☰乾」は陽の完全な状態を表す卦であることはおそらく偶然ではないだろう。



図1 中国 龍泉
14世紀後半～15世紀前半
高取家コレクション



図2 中国 景德鎮
17世紀前半
富永コレクション



図3 有田
1630～1640年代
赤戯幸コレクション



図4 有田
1640～1650年代
柴澤コレクション



図5 有田
1650～1670年代
柴田夫妻コレクション



図6 有田
1670～1690年代
柴田夫妻コレクション



図9 有田・辻
安永年間（1772～1781年）
寺崎恵美子氏寄贈
「安永年應叢香舎需／製辻常陸大掾愛常」染付銘



図7 有田
1710～1740年代
八角壺蓋 下白川窯跡



図8 有田
1750～1770年代
柴田夫妻コレクション



図10 有田
1760～1790年代
柴田夫妻コレクション



図11 有田
1820～1860年代
瀬川竹生コレクション

17世紀後半から末には青磁や白磁に型による陽刻で施すものが増える。多くはB類で八種の卦を用いるA類はほとんどないが、陰刻文の柴コレ0618（図5）は八卦の後天図（文王后天八卦）に正しく則ったA1類で、平面形が八角であることも含め八卦の意味を理解した構図で表現されており、この段階では特異な例である。延宝期頃には青磁や白磁の皿や鉢の内側に陽刻で八卦の一部の種類を施すB3類（図6）が多く、南川原窯ノ辻窯跡から陶片が出土している^{注5)}他、B1類（柴コレ1859）もみられる。

18世紀前半の例は少ないが、下白川窯跡からは輸出タイプの八角壺の蓋口部外面を各辺に合せて区切り、その中に「☵離」をへう彫りで陽刻し、遺存する2辺のうちの1つに染付を加えたB1類と思われる陶片が出土している（図7）^{注6)}。

18世紀後半には染付によるA類が主になり、A1類（図9）とA2類（図8・10、この2例はいずれもA1類の逆順）が混在している。南川原窯ノ辻窯跡からはA1類と見られる資料が出土している^{注7)}、南川原山では八卦文が継続して用いられたようである。図9は辻製の対の香炉で、口部の八卦文はそれぞれ后天図と先天図に則っている。裏銘から叢香舎（米川新流香道）の注文で作られたことがわかる八卦香炉である。

19世紀も引き続きA1類・A2類が用いられ、十二支文と組み合わせたもの（柴コレ4073等）の他、八卦文と十二支文を散らし文様にしたA3類（図11）など、八卦の意味を理解した上でデザインとして昇華されている。

肥前磁器の八卦文は、17世紀前半に景德鎮の染付磁器の八卦文から一部の種類のみ採用して始まり、後に八卦の意味を踏まえて表現されるようになっても景德鎮の八卦文のように太極図（太極陰陽図）と組み合わせ用いられることはなく、選択的に取り入れたことがうかがえる。

注

- 1 肥前磁器の八卦または算木文様は、本来の意味を理解しているかは別として、いずれも由来は八卦に求められる。総称としては八卦文が適当であり、算木文とする場合は1～数種の卦のみ用いるものに限定した方がよいと考える。
- 2 佐賀県立九州陶磁文化館（1984）『窯ノ辻・ダンバギリ・長吉谷』肥前地区古窯跡調査報告書、付図
大橋康二（1994）『古伊万里の文様』理工学社、p.216
- 3 有田町教育委員会 1992『楠木谷窯・天神町窯・外尾山窯』町内古窯跡群詳細分布調査報告書 第5集、PL.12-5
- 4 注3書、PL.20-1
- 5 佐賀県立九州陶磁文化館 1986『南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯』肥前地区古窯跡調査報告書 第3集、p.12 Fig.7-16
- 6 佐賀県立九州陶磁文化館（1988）『下白川窯・年木谷1号窯』肥前地区古窯跡調査報告書 第5集、p.18 Fig.16-15
- 7 駒澤大学禅文化歴史博物館 2010『窯跡資料にみる有田焼の変遷－有田・南川原窯ノ辻窯跡出土の陶磁器－』考古資料展4「有田焼の考古学」図録、p.99 Z13-016

参考文献

- 大橋康二（1994）『古伊万里の文様』理工学社
佐賀県立九州陶磁文化館（2012）『古伊万里の文様集成』
渡辺芳郎（1993）「シリーズ やきものに見る文様(24) 八卦文様」『セラミック九州』No.27 p.7

史料紹介

たけどみ いなん 「詠磁器」

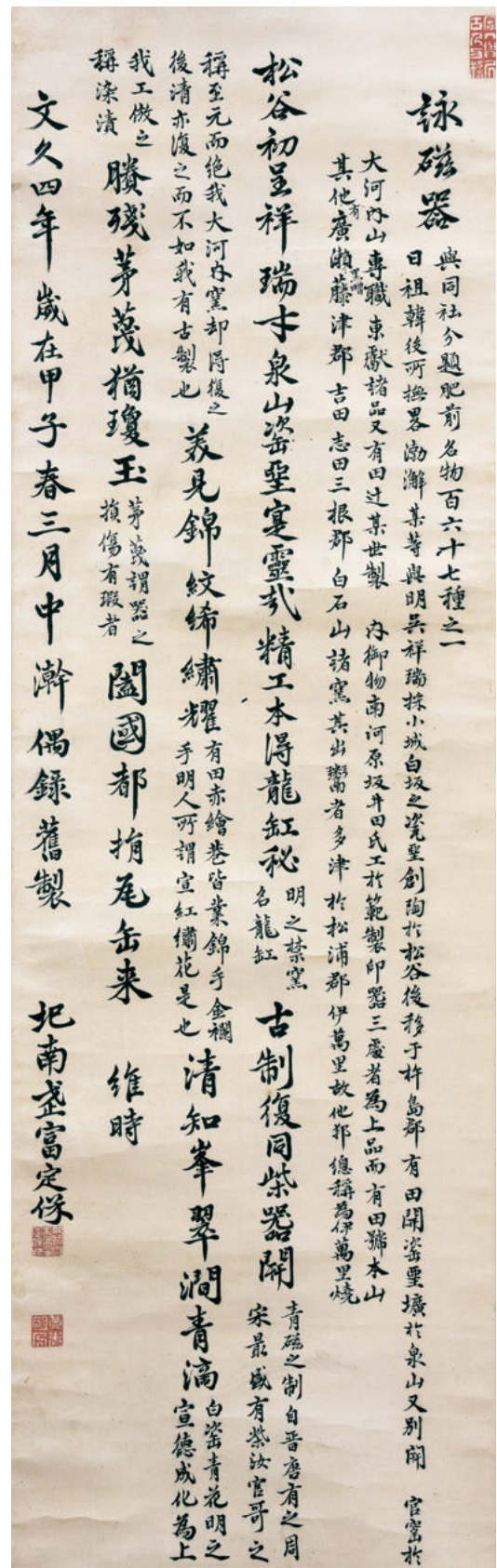
幕末佐賀藩の儒者武富圯南（1808～1875）には肥前陶磁に関する二篇の詩がある。安政5年（1852）11月、10代佐賀藩主鍋島直正の命を受けて作った「陶器贊並引」と、詳しい制作時期は不明だが、文久4年（1864）3月以前作の「詠磁器」である。いずれも中国の経書や日本の記紀に見られる陶業伝承及び日本で珍重されてきた中国・朝鮮半島の陶磁器などに触れつつ肥前陶磁の歴史や特徴を詠む。佐賀藩が殖産興業のため陶磁器生産に力を入れていた時期にあって、藩儒が試みた肥前陶磁史の叙述であり、内容の正確性に関しては留保せねばならないが、幕末段階での歴史認識の一端を示すものといえる。

このうち「詠磁器」は当館所蔵の圯南自筆の書幅によって詩句を知ることができる（資料名：武富圯南磁器七律詩書、収蔵番号：03275、1995年受入、竹田磁智夫氏寄贈、紙本墨書・掛幅装、寸法：107.0×33.2cm）。七言律詩の随所に圯南の自註が加えられ、詩句の補足説明がなされている。

詩題の下には『肥前名物題註』（作者不明、嘉永～安政頃成立か）第8「磁器」を一部修正した文章が序文的に挿入されている。詩は肥前磁器が中国陶磁を手本に青磁・金襴手・染付など各種類において展開してきたこと及びその美しさを謳いあげる。具祥瑞・渤海某による小城松ヶ谷での磁器の試焼に始まり、泉山での陶石発見以後、景德鎮窯の技術水準に迫り、あるいは周・宋の名窯に匹敵する青磁を復活させ、美しい色絵や染付の製品が生み出されてきたとしている。

「陶器贊並引」を縮約したかのような内容だが、表現や語彙にはやや相違がある。落款部分には文久4年（1864）3月の「録旧製（旧製を録す）」とあるので、詩作の時期はこれ以前であることが分かり、公命による「陶器贊並引」制作の副産物である可能性が考えられる。

（芳野貴典）



武富圯南「詠磁器」文久4年（1864）
佐賀県立九州陶磁文化館所蔵 竹田磁智夫氏寄贈